

## 府立学校の在り方懇話会高校教育部会（第7回）の開催概要

1 日 時 平成13年7月12日（木）10：00～12：00

2 場 所 京都府公館 第5会議室

3 出席者

（部会委員） 9名 <欠席3名>

（京都府教育委員会）津守教育次長、太田指導部長、松本指導部理事、  
塩見高校教育課長ほか

4 概要

(1) 報告

ア 平成14年度山城北・南通学圏の入学者選抜等の改善について

イ 府民からの意見紹介

府民からの意見の概要

- ・ 次の点について明らかにしてほしい。  
教育の機会均等を保障する上での定時制・通信制教育の果たしている役割  
教育条件の整備に関する事項、特に定時制の適切な学校規模、学級定員  
定時制教育・通信制教育の意義  
朱雀高校通信制の適切な学校規模と通信制課程新設の必要性  
定時制教育から見えてくる教育課題と解決の糸口
- ・ 中学生の夢や希望をかなえるために、全日制への進学希望者がやむを得ず定時制へ通うことのないよう、全日制高校、とりわけ公立の定員増の実現に向けて協議を進めてほしい。

(2) 協議

前回の部会を踏まえ、高校の学校規模等については、府内一律の議論ではなく、高校の将来像を想定しながら、地域性や設置学科、課程などそれぞれの状況に沿って検討する必要があるという認識に立ち、協議を進めることが確認された。

協議のポイントとして以下の5点に整理し、それぞれについて意見交換を行った。なお、「中高一貫教育の京都府における在り方」については、次回の部会の議題とした。

地域性と学校規模や配置

普通科の類・類型制の在り方と学校規模

総合学科における学校規模や配置

定時制・通信制課程の規模や配置

## 中高一貫教育の京都府における在り方

### イ 意見交換

#### (ア) 地域性と学校規模や配置について

##### < 委員の意見要旨 >

- ・ 生徒の急増期に新たに学校を作ったのが、すべて南部地域であることを考えると、急激に人数が減る可能性も高いのではないか。そのあたりをしっかりとつかんで適正配置を考える必要がある。
- ・ 分校については、交通事情の変化により本校に通える状況にあるのならば、教育上は、本校の多くの生徒の中で学習できる方がよいと思われる。
- ・ 分校については、通学面での課題は少なくなっていると思われる。一方、現状としては、本校の学習形態では対応が難しい生徒、例えば不登校であった生徒が、いきいきと学習している状況もある。そういう役割も現在の分校は担っている。
- ・ 北部地域は、新設校もなくそれぞれが伝統を持ち、地域に根付いている状況がある。簡単に統合というわけにはいかないだろう。北部については、ある程度小さな規模の学校も仕方がないのではないか。
- ・ 南部でも規模の大小があるが、その原因は、中学生の人数、交通の利便性や総合選抜制度における地理配分との関連等々、様々な事情により現状の学校規模になっているということであるが、何かを基準に英断していかないと現状のまま落ちてしまうのではないか。
- ・ 北部の小規模校については、地理的な課題、公共の交通機関の状況等を総合的にみて通学できるかどうか、統廃合の判断の第1ポイントではないか。
- ・ 高校の学校規模の最小ラインの考え方として、本校については、多様な教育内容の展開の維持との関係を考えていけば、どこかで線が引けるのではないか。ただし、分校については、別の考え方をしなければならないだろう。
- ・ 北部で少子化が進み、学校を維持することが困難になった場合、寄宿舍を整備して教育を保障するという必要も必要になってくるのではないか。

- ・ 学校規模の最小ラインを条件の一方に置き、もう一方に交通事情で条件を付け、その両方のバランスにより、統廃合を英断していくという考え方もできるのではないか。
- ・ 統廃合を考える視点として、学校規模を確保することが大切なのではないか。

#### (1) 普通科の類・類型制の在り方と学校規模

##### < 委員の意見要旨 >

- ・ 北部・南部地域の問題とも関わるが、特に北部の場合は、学校をなくすことが難しければ、学校規模は当然小さくなる。そうなれば、類・類型を設定しない普通科があってもよいし、そうせざるを得ないのではないか。
- ・ 第 類について、高校へ入る段階で人文系なり理数系に分けるということについては疑問を感じる。高校3年間での学習を通して、自分が人文系、理数系のどちらに向いているかわかってくるものだと考える。
- ・ 大学では、人文系の学部であっても、経済学部では数学がわからないとついていけない。心理学でも数学はいる。そういう中で、高校段階で人文系、理数系と分けることにより、自分は文系だから数学や理科はいらないというイメージを与えてしまうことに抵抗を感じる。
- ・ 全国的には、理数科や英語科といった専門学科を設置している状況がある。京都府の第 類理数系や英語系は、それらに類するもので充分意味があると考えている。専門学科に近い学習ができるとともに、普通科であるために、専門学科としての縛りもなく、幅広い学習もできるという位置付けで存在意義はある。
- ・ 類・類型制の在り方は、非常に大きなテーマであると考える。  
後期中等教育をどう位置付けるか、大学との関連でどうあるべきか、あるいは教育理念にも関わる難しい問題である。
- ・ 類・類型制については、制度を維持することを前提に、1学年の適正な規模や学校の配置について考えるのがよいのではないか。

- ・ 通学圏の中で、学校ごとに特色を出していく方向ならば、通学圏内のすべての学校に第 類がある必要はない。学校ごとに分担すればよい。
- ・ 特色を選べるようにするために、寄宿舎を積極的に利用するというのも一つの方法である。

#### (ウ) 総合学科における学校規模や配置

##### < 委員の意見要旨 >

- ・ 久美浜高校の生徒たちの様子を見る機会があったが、がんばっている様子がかがえた。京都市内の方でも、総合学科をもっと P R して設置していかなければならないのではないかと感じた。
- ・ 総合学科は、普通科よりも人的、物的、財政的な支援が必要な学科である。そういう意味からも、あらゆる面から効率よく教育を展開するには、6 クラス規模が適当なのではないかと考える。
- ・ 大部分の府立高校は普通教室を 30 くらい持っている。そういう学校を総合学科に転換していく場合、特色ある設備も整備することを考えると、6 クラス規模ぐらいがよいのではないか。
- ・ 現在の久美浜高校の総合学科は、大部分の生徒が丹後通学圏で占められているということを考えると、通学できる範囲に学校があることが望ましいのではないか。全国的にも通学できる範囲に整備しているところが増えているようだが、具体的には、府内に 4 ~ 5 校程度が必要なのではないか。

#### (イ) 定時制・通信制課程の規模や配置

##### < 委員の意見要旨 >

- ・ 単位制の柔軟性を活かした、いわゆる三部制の形を持つ定時制高校を設置すべきと考える。様々な事情の生徒が現実にいる中で、単位制のシステムはいろんなニーズに対応しやすい制度である。生涯学習の機会の提供という面でも単位制の学校は必要ではないか。

- ・ 進学率が100%に近い状況の中では、高校教育として多様な学習の場を提供する中で、よりきめ細かな指導によって子どもたちが学んでいく場も設定することが必要ではないか。その具体例としては、総合学科や定時制・通信制の学校などがあると思う。
- ・ 全日制と定時制の併置は、校舎やグラウンドの使用の点から、全日制、定時制ともに負担を強いられている状況がある。そういう意味でも、定時制の単独校の設置は一つの課題である。
- ・ 全日制の教育環境に耐えられない生徒が増えてきているように感じる。また、今後も増えるのではないか。二部なり三部なりという定時制の学校のシステムは、そういう生徒への高校教育の機会の提供として意味があると思われる。少なくとも、京都市内と山城地域に1校ずつ、北部地域にも1校は必要ではないか。